

心を拓き、心を繋ぐ

若松高等学校 三年 福田 悠里



みなさん、こんにちは。

さて突然ですが、みなさんは今日、人と会った時に、笑顔で挨拶をしましたか。私は若松高校に入学して、挨拶の「挨拶」は自身の心を拓くこと、そして寄り添うことという意味があることを学びました。人と会った時には、笑顔で挨拶をする。それだけで、自分ばかりではなく、相手の心もあたたく元気になる気持ちにできると思います。

私がこのことを強く実感したのは、毎年10月にこの若松で開催されている若松みなと祭りに、ボランティアスタッフとして参加した日のことでした。暑い中での活動で、大変なことも多々ありましたが、その大変な思いを払拭してくれたのは、祭りの運営スタッフのみなさんはもちろん、協力企業の方々、そして

ご来場いただいた地域の方々の笑顔と挨拶でした。

ある企業のブースで担当の方と一緒に準備を進める際に、担当の方が笑顔で「おはようございます、手伝ってくれてありがとうございます」と声をかけてくださいました。また、ブースの企画に参加してくれた子どもたちからも、「こんにちは」という元気の良い挨拶をしてもらいました。このように、様々な方と挨拶を交わすうちに、私の緊張や疲れはどんどん軽くなり、大変な中でも最後まで笑顔でやりとげることができました。年配の方々や幼い子どもたちといった、普段は話す機会があまりない年代の方々からの短い挨拶一つで、こんなにも心が温かくなるのかと気づき、私は改めて挨拶の大切さを感じました。

さらに、ここでの繋がりは祭りの日だけではありませんでした。後日、通学中に電車を待っている時に地域の方に声を掛けられました。その方は、私が若高生であることに気づき、毎年若松みなと祭りを楽しみにしていること、そこでいつも元気に

挨拶をしてくれることが嬉しいという話をしてくださいました。

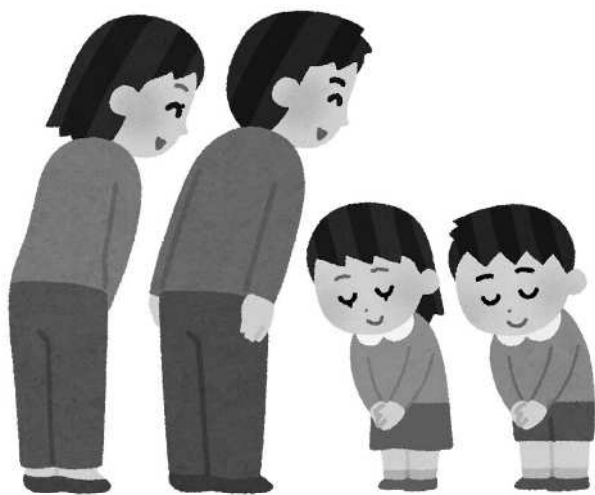
祭りの中で交わした挨拶の一つひとは短いもので、時間によればほんの数秒です。しかし、その挨拶で地域の方が私たち学生を身近な存在として捉え、親しみを感じてくださったことに、私はとても驚きました。私が思っていた以上に、挨拶はマナーや礼儀という枠を超えた大きな力を持っているのだと感じました。そこで私は、この挨拶を通じて、「地域の繋がり」をさらに深めることができるのではないかと考えるようになりました。

若松には様々な世代の方々が住んでいらつしゃいます。昔に比べ、世代間や地域の繋がりが希薄化しているとされる現代で、地域の繋がりを築いていくことは、とても大切なことだと思います。また、この繋がりは平時ばかりでなく、近年増加傾向にある災害時や、防犯面においても大きな支えになるのではないかと私は考えています。

今では、私はすれ違う方々に笑顔で挨拶をすることを心がけています。逆に、地域の方々から気持ちの良い挨拶をして下さることも少なくありません。いつもの道で人とすれ違う時、顔をあげて笑顔で挨拶をする。1回1回はたったそれだけのこと

でも、この積み重ねが、お互いを元気にし、地域全体をもっと優しく、温かく、居心地のいい場所にしていくために、私ができる第一歩ではないかと考えます。

皆さんも、ほんの少し笑顔を添えて挨拶をしてみてください。それだけで、誰かの気持ちを明るく、元気にできるかもしれません。そしてその挨拶を通じて、地域との繋がりもきつと深まっていくと思います。挨拶は人の心を拓き、心を繋ぎ、そして人が暮らす地域を明るくする力を持っている。私はそう信じています。



動物との共生、 今私にできること

若松商業高等学校 二年 蒲生 七海

みなさんこんにちは、若松商業高校2年の蒲生七海です。私は若商のスローガン「限界を超えろ 全てはその一歩から」のもと、日々チャレンジするという事を心がけています。そのチャレンジの1つとして、昨年度「ふくおか高校生知の創造塾」という高校生が大学の先生たちと一緒にテーマごとに本格的な学びや探究を体験する場に参加させていただきました。本日はその時に探究した「人と動物の関係学」について話をしたいと思います。宜しくお願いします。

人と動物の関係学とは、動物の行動や福祉、健康、社会的な影響等、人と動物の相互関係を研究するものです。これは、福岡県が力を入れている人と動物、環境の健康はひとつと考え、「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を一体的に守っていく「ワンヘルス」という考え方に繋がります。

私たちは色々なことを調べていくと人と動物の共生には、様々な問題があることがわかり、その中から「多頭飼育崩壊」

「動物虐待」の2つに関して重点的に調べ、まとめていくことにしました。

まずは「多頭飼育崩壊」です。これはペットの数が増え経済的にも破綻し、ペットの適正な飼育ができなくなった状況のことを指します。年々その数が上昇傾向にあり、令和元年では2000件以上もの苦情が寄せられていたことが環境省のデータからわかりました。テレビやYouTubeで見る多頭飼育崩壊は20匹以上や100匹以上など：ありえない数の犬猫に関してのものが多くですね。

しかし、実際に多くの苦情が来た飼育頭数は違います。なんと、約2000件の内、半分が2頭以上10頭未満の世帯で、多頭飼育崩壊とは思いの外身近に起こりうる問題なのではと考えることができます。この問題を他人事と捉えず、自分事に捉えることが、この問題を大きくしない方策だと思います。次は「動物虐待」についてです。これには身体的虐待とネ

グレクトの2つの種類があります。実際はネグレクトという飼い主の健康管理や病気の管理不足の割合が多く、動物環境・福祉協会Evaの2023年の虐待通報内容のおよそ75%を占めるそうです。この虐待の件数が飼育放棄に繋がっています。これらを調査し、考えていく中でこの問題をそのままにしてしまうと殺処分につながることに、更に調べると具体的に対策をしている2つの場所があることがわかりました。

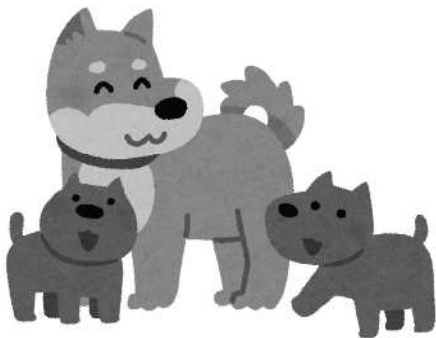
1つ目はドイツです。ドイツでは動物の殺処分場がありません。それはただ野良の動物を放置しているのではなく、たくさんシエルターを確保して、安全に動物を保護しています。また犬税やドッグライセンス（イヌの免許）の導入によって、無責任に犬を飼わないように徹底して対策をしています。

2つ目は奈良市です。奈良市は今年度を含め6年連続で犬猫の殺処分数0を記録しています。奈良市は、TNRという、Trap（捕まえる）、Neuter（不妊・去勢手術を行う）、Return（桜の花びらのように耳をカットし自然に返す）活動をしています。これ続けると必要以上に野良猫の数が増えないようになってきます。そのような活動に対し、市が

手術費の負担や支援金を送ったりしており、市とボランティアで動物を支え合っているような仕組みができています。

福岡県でも2021年から公益財団法人「どうぶつ基金」がTNRの活動を始めています。このような活動を広めていくことでワンヘルスの中の1つ「人と動物の共生」が達成できるのではないかと私は思います。これからも「人と動物の関係学」について考えを深めていき、私たちが健康に生きていくために、動物の健康、環境の健全性も1つの問題として、考えていこうと思います。

これで発表をおわります。御清聴ありがとうございました。



人をつなぐ「おはよう」

高稜高等学校 三年 櫻井 湊仁



こんにちは。高稜高校の櫻井湊仁です。本日は、私の「おはよう」に関するエピソードをお話しさせていただきます。

初めて小学校に登校した日を憶えている方は多くないでしょう。私は憶えています。という学校に行けなくなってしまったからです。おたふく風邪でした。学校に行きたいのに行けなくて、一週間のあいだずっと、もどかしく悲しく寂しくて、新品のランドセルがいつ出番が来るのかと訴えかけてきている気がしていました。

出席停止期間が明けて、やっと初登校できる日、近所の上級生が家まで迎えに来てくれて、学校まで最高に楽しい気持ちで歩きました。ところが、上靴に履き替えて上級生と別れたとたん心細くなり、どんな風に教室に入れば良いのかわからず、私が休んでいる間にすでに出来上がったクラスの輪の中に自分が入れるのか不安になってしまいました。クラスに知っている子がいなかったことや、私の席が教卓の目の前の最前列中央だったせいで、クラスの流れに乗り遅れた「ひとりぼっち」の私が目立つのが怖かったのです。

私は教室に入り、自分の席にすぐに座りました。恥ずかしさを我慢しながら顔を上げた時、右隣の席の女の子が「おはよう」と声をかけてくれました。私は反射的に「おはよう」と返事をしました。「熱下がったの？よかったね」「うん、もう治ったよ。よろしくね」と話していると、あとから来た後ろの席の男の子も「おはよう！待って！待って！入学式の日話したの覚えてる？」と明るく話しかけてくれました。それがとにかく嬉しくて、胸を塞いでいた不安は、二人のおかげで吹き飛んでいきました。それから後も、来た子や会った子と次々に挨拶を交わし、みんなより一週間遅れで始まった私の学校生活も明るくスタートすることができました。

私は今でも、女の子が最初に掛けてくれたあの「おはよう」の声のトーンや表情を鮮明に思い出せます。そして、その「おはよう」の明るさで一瞬にして心が軽くなった感覚と目の前の全部がぱっと明るくなった感じも思い出せます。それは、あの「おはよう」が、「私を認めてくれた」という安心や喜びを私にもたらしたからだと思うのです。

「おはよう」の一言を発することは、「私はあなたがそこにいることを知っているよ」と相手の存在を認めることであり、同時に「私はここにいます」と自分の存在を知らせる発信だと考えます。つまり、あのとき自分の存在や居場所を失っていた私

に、友人たちの「おはよう」の一言が私の存在を認め、私に居場所をもたらしてくれたのです。挨拶を交わし合うことは、互いの存在を認め合うことに他ならないのです。

さらに私は、気持ちが進められた挨拶は、相手の存在を認めている上に、その存在を「尊重」しようとしている姿勢の表れだと考えます。私は、挨拶には込められた気持ちによる「表情」があると感じています。挨拶を発する人の気分や相手を思う度合いが「挨拶の表情」に表れ、何気ない挨拶に込められたその感情に私達の心も動かされます。例えば、目も合わせないようなうわべだけの感情がこもっていない挨拶は相手をないがしろにしているようにしか感じないし、気持ちの良い挨拶は自分を大切にしてくれている感じがします。受け取る側の解釈にもよりますが、挨拶は表情一つで、自分や相手の存在価値を高めるものだと思います。

挨拶がなかった時や返してもらえなかった時に不快になるのは存在を軽視されたり否定されたと感じるからであり、また挨拶の仕方によって人の印象が左右されるのはその挨拶の表情によって自分を尊重しているか否かを感じ取るからでしょう。挨拶はコミュニケーションの入り口であり、マナーであると言われます。そして私は自身の経験から、存在証明としての挨拶は互いを認め合い、尊重する「他人容認」「相互理解」の基本姿勢の表れでもあると実感しています。

早朝、我が家の前からは、「おはようございます」という声のあと、大きな笑い声が聞こえます。出勤前に家の前を掃いている父が、男性と談笑している声です。父は男性の連れている犬にも「ふうちゃん、おはよう」と言ってよしよし撫でて遊び

ます。散歩中の大型犬「ふうちゃん」はフサフサの尻尾を大きく振って父に甘えます。これが毎朝の光景です。近所の方でも知り合いでもありません。でも、知らない人が連れた知らない犬が毎朝必ず父に会いに来てくれて「おはよう」をするのがルーティンになっているのです。たまたま犬の散歩で我が家の前を通って挨拶を交わし合ううちに、父と男性とふうちゃんは自然と親しくなったそうです。

そういえば、父にはそういう「あいさつともだち」が他にもいます。小学校の近くの交差点まで毎朝自転車で向かう旗持ちのおじさんや、通学中の小中学生などもそうで、さらには通勤途中に車で毎朝すれ違うだけの人とも、車の中から頭を下げて会釈をしているうちに知り合いになっていきます。他の時間に他のところで会っても声を掛け合うくらい、毎朝の「おはよう」から顔なじみになっています。どこの誰かはわからないけれど、毎朝「おはよう」を交わしあう「あいさつともだち」。私はここに北九州の人たちのぬくもりを感じ、こういう光景がとても好きです。

今、北九州市は九州の「住みたい街」や「住みやすい街」で上位にランキングしています。それは北九州市の人々が他者を受け入れ、尊重し合う気持ちを持ち、大切にしているからこそだと思います。挨拶から始まる街のぬくもりは、北九州、特に私の暮らす若松の豊かな風土の象徴であり、それが住みやすさにも繋がっているのではないのでしょうか。互いを認め尊重し合う若松の風土こそ、私のアイデンティティを支える大きな誇りです。

ご清聴ありがとうございました。